

No.



十
化
三十三
早
七
月
日
(1)

類
鑑
十
記

JUN 29 1928

(印文堂發賣)

(MADE IN JAPAN)

短編小説

花

井田 盛雄

淫賣婦であつたと、人の妾であつたと、そんな事ありりも、俺達の妻に何のちやまがあるかと、と昂つた西村で、井田は尋ねて見りたつた。

頭の上に陽事ひも束ねたやうな七月の、暑さや、暑さで、草花になつても汗が流れて、

用けつたの窓から生返つて風が流れて来た

井田は、誰か、一枚紙に、これは王女

めくつた。さういふ金に、確に値もうるもの、あつた。

花に、時を、つた。林崎、急な道を、

て、みくよの、あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

古く、人路と戦ふとて、
 併も素生の和ぬき、
 のひあうた。併し、
 ものは、結の心とは、
 ものでは友りと諍めて、
 必死と戦ふを、
 だ、
 か、
 難い、
 今晩休日で、
 と言つた、
 てみた、
 食より、
 併何を、
 吾、
 して、
 て、
 を、
 は、

「男表に互は生れてゐる事」
 あり。秋田は生れ事をして、ホーリに又も
 入れた。その時たうた。秋田の顔も
 びく。知人だ。瞳で射、やうに秋田の顔を眺め
 て言つた。

「どうだあ、少し身が」なすも「これは、余り
 評判が良くな」やうた。

「はあ」と言つた秋田は、とうと移りこ
 度あり。たぬ父がんだ。僕の心持ちが分る事
 なり。返答するわけが難い。文句が言へない。

「あつて聞けよ、それお茶を淹でる。もう考
 へたら、食事で済ませるのだから。」

「聞きたあ、お茶の味をいふ言ひは、思つ

た。お茶の味は、お茶の味。4ヤブス、いふ言ひは、
 の。てん女事をいふ言ひは、お茶の味。お茶の味。

「も、お茶の味は、お茶の味。お茶の味。お茶の味。
 し、お茶の味は、お茶の味。お茶の味。お茶の味。」

「お茶の味は、お茶の味。」

「お茶の味は、お茶の味。」

「お茶の味は、お茶の味。」

「たう」

「何にも言へてくたはねなくちや返答生

来なうたやなうですか」

「うん、うん、そうたあ」

「お父が、あう、方返答をいたのび、お母が、

お父さんに、お母さんに、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

お父さんは、お母さんは、お父さんは、お母さんは、

(MADE IN JAPAN)

意を消してさうとする。計略を目にす
 ところ。同時に一寸では、俺の前途を思つて
 是れを、さうした意にも尻にうゑるの事は
 毫だりた。併し、お母の志望は、結婚によつ
 ての解決と本々の計である。その當には
 お父夫婦を説服せよ。お母の唯一の行動
 として残されたのは、おれに頼る。おれに
 お母の志望の進行に比例して、お父夫婦の心
 変分の日には、お母にはおれに頼る。おれに
 うを志望せよ。おれに頼る。おれに頼る。

四

お母は、お母の志望に、おれに頼る。おれに
 お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに
 お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに

お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに
 お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに

お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに

お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに

お母の志望に、おれに頼る。おれに頼る。おれに

無用、無用は、女を信にたう島、疑うてまた自
 分の下舞士を獨りではだたうたうた。魚のこ
 人産生は、さういふ親に運入られ、かたに
 流木来た。二十才そこそこの娘や、八百圓の
 銀行貯金を持てあまのモ一の不思議と
 一晩にたうた。人風り暑うた。社田に定まる
 了。その心は、山崎に皆領土をたうた。べあ
 ったが、ドコどこは吾にたうた。たうたと
 三ヶ月前、友人中目では、彼はたうた。僕も
 の通り言葉になつてゐる。急がうた。たうた。

社田は、善通一船り女伶とて、さういふ
 に氣を遣ふなかつた。が、段階的に、その態度
 を肯定するやうになつて、おれを愛せしめ、
 つつとやめするが、社田の好意を返つたのだ
 た。で、おれも社田を、さういふ二、三、悪友に、誘は
 れた。さういふ。さういふ。食下た。もた。食事に良し
 生動。さういふ。やうになつた。

さういふ夜、おれは五時で、さういふ親友一人、おれ
 分た。さういふ。暖かさ。さういふ。社田は一人、おれ
 社田は一人、おれ

秋田が都を取つて二三日の生えをするといふ女
は「あ一人は珍しく」の事と訊いて、他に
母も、事なきが、あるのにもあらず。秋田の
前に来て坐つて話してゐた。

トコトキ 吾は幾人金持人を訪つてゐる人
左あ）秋田は世の道にじりりと世の道を踏
めりて訊いたうた。

何ですうてい 女は不嫌友を誘へた。
トコトキ ば、友人の所に、
何新目だ

何ですうてい 女は秋田の某の平に喰仕を
し、何ういふと、美事な毛皮になつて言つた。
加代に來て二ヶ月、ここに勤めて一ヶ月に
もたうなり。

吾はおぼたで、山の中へ、
こゝろよ、山の中へ、
すは、隣りと言へば、
にも、所へは、
事も、
ア、

にふたと鶴、家、ほ、り、
も、言、て、協、定

五性は何をもかゝるものなるに
あつた

お
て
い

秋日は、輓握り等望りし〜、彼女の十人針の
生機を運〜れた、砂漠の一所星の至性^生は
あすうかり識つた。だうた。

其
木
久
3

義
起
5
卷
12
彼
18
主人
主人
14
12
1
人
也

おれは、だうも、鉄田、彼女、富子、を唯一

の	奇	12	1	2	3	右	の	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

左
 右
 上
 下

秋田は、
4ヵ所
スイス
と
食
で
な
か
る
秋田
白
に

坐、二、ろ、ろ、
無聊、五、ト、二、七、一、
に、
転、
語、
た、
翻

い
た
の

土曜
日
休
み
や
方
~~フ~~
休
み
た
、
た
ろ
乙

う
ま
た
~~あ~~
は
口
じ
い
は
ち
だ
い
た
~~あ~~
あ
え
の

顔髪を平髪にする髪でーる。そのはくう。

人た曉を懸つ
めまきの
目に輝く
なみち
秋田の
山

712 元 12 生 意 向 付 下 南 2 2 井 4
わうに 美衣子E某

信之 一書 何處 外行 方有

そ
う
書
い

左

かたくり

た ふ く 。	刑 言 河 と
姓 女 も 、	其 可 で
結 た の 人 物	誰 か の 左 へ
地 評 を 一	土 。
二 級	

ち
 ち
 打明けたりた。た。
 ち。もうその時ハ昔
 易(か)まびありたか、序幕の上には急ぐても友
 い数(かず)考(かう)者(しや)を(わ)たりした名(な)いりて通(とほ)や二方(ふたはう)つ
 た。

僕は君を愛してゐるが、
 一死では足らぬに
 〇〇は女の胸の奥に
 瞳をこめて見
 友方うへに
 〇〇は女の手を
 〇〇に
 〇〇は女の手を
 〇〇に

向うの壁の上に立つた一葉のユリを
リ返してゐた。

ハロロイ。何故多事な方々

其時 ハロロイは 彼らに 車に乗るを要す

この左を 離して 向うを

彼れのおくたを 昇りおめた。北田は 珍らしい

使への意の度には 話も出来た。頭の中は一閃

す。度々も 暫くして、ふり 北田は左

の車を 降りて 其の 用は 二人 深く 話合

た。トロロイは 車を 降りても 話合は 出来た



髪は 左の 方から、左の 方が 高

貝へ 心残り になり、 北田は 其の 話

始終を 隔てて 話した。

北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 彼れにも 彼女にも 人生に 始末の 話

た。たの 方、 北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 左の 方から、 北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 左の 方から、 北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 左の 方から、 北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 左の 方から、 北田は 左の 方から、 北田は 左

北田は 左の 方から、 北田は 左の 方から、 北田は 左

肩を揃へて歩いた。電車通達の二丁より先の
草の上を、車トトヤキヤリはいたやうに固
ま行りばよかつた。二人は幾度も途中で立ち
上まつた。所々に繁つたエーカリの大樹、幹
を背に、人目を離れ、接吻を重ねた。そして
いよいよは歩き方から這う這うに這ひ、定
本の方と認められた。

「昔、ヤウ」牡丹は無言のうちに立ち上
り、心の中を覗き込み、たゞた、
私を思ふ方々と、
彼女は今を待つ

と立ち上

三日の夕方、牡丹は、
牡丹は、
牡丹は、

牡丹は、
牡丹は、
牡丹は、

牡丹は、
牡丹は、
牡丹は、

牡丹は、
牡丹は、
牡丹は、

牡丹は、
牡丹は、
牡丹は、

お母の方に出て来た。お母は新築の、暖かい
 部屋を、手につけて、まに堅牢な柱を、一た

ちやど、一たう

うん、お母さん、あつた、びつと、と、と、と

と来た

こりや。お母さん、こりや、こりや、こりや、こりや

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん

$\frac{1}{12} = \frac{1}{12}$

け
た
o

した。

七
十

お坐り) 牡丹は喜喜の床に寝かして置く。
 新画の持子に指した。賀女は何故か黙って之
 うるふたのび、牡丹は立ち上りて彼女の衣に
 迫つて、胸に手をかけし受け手を脱ぐべから
 ず。女の判が油の香りを鼻から嗅ぎしやうに
 つた。女の足もと、女の雪肌牡丹の赤膚に
 迫るた。

よく承知見うかつたのあ
 る、更事を下りて、数あるにみちやうに
 事なりて新に師長とて附人たる

牡丹は暗に表懐て、彼の全身を下りて有る
 牡丹、彼の顔を見、彼の手に指す。牡丹の

牡丹には服けすに。彼の指口腰を下りた。
 牡丹は、その全身を指し、彼の指口腰にさした
 何れに用ゐるやうに。そのとき牡丹

牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした
 牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした
 牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした

牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした
 牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした
 牡丹は、彼の指口腰にさした。彼の指口腰にさした

五

張一

12
24
1

24
12
12
7

女
や
う

東洋と海外に於ける
やゝ大数の

3

印政

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

た。秋田は、暗目に燃へ上つた情熱が、未だ
 燃へ盡きずに全身の聲に大きな響にたうて舞
 き廻りてゐる。を意欲のやむおさへつけ
 みた。友田に氣付かぬめやうに兩人は走つて
 上。女は七等車は、自由な身たうたが、そ
 の僅かの三十分間を、どててどてて目も
 なかりた。秋田は女を膝下に抱りて、目
 睛婦人の平たう顔望とは、とても此程にな
 め、白く美しい稲都の整つた顔をも、想々と
 眺めた。内へと雲の造りた空は、もう、収
 束

や又然の想像からけろくろと遠くに飛つてゐた
 る。一た友人の国後を焼く古時 秋田は、新
 事の争奪や神の事方人か、どうでも本と
 此方と前を聲に歩みを響けるのたうた。
 女は指を主で結び膝下を傷りてはくと微笑し
 てまうた

初めてこの経験は、才二日目から最後迄の計
 算したのより大きな友池院となつてしやうあ
 り。それは確かに夏空の
 すくかりとけつた氣を、暖り葉音をの明

土の裾に脚を揃へた。この答へ言をむ妙に調ふ
 ハリ左の口は中々おがふ。支那村屋屋より世
 歩きしやうと。

飯屋の軒燈の足る所迄来ると、女は言ふ
 赴きよ左の鼻と鼻が観る。何となく有る。奇
 しく、頭より通に思ふ。おは。お中になやう。きり
 有。なかを来るの。と訊いた。

律儀にあらう。

秋田は不世高極うたうで。彼女の素顔を
 与して「復た、にしやうか」と

一と、素、歸りに暮らう。永に行く。

なる。

何となく、女は、女の肩に手を置いて、五に。女の
 帽の下のさしを、左手で、目隠す。顔の上に引
 き寄せ、笑ひ笑ひ言ふた。

未事だあ。

子ふふ。

女は、何となく、内室を廻り、左やう、

何となく、

何となく、

あ、い、う、え、お

[illegible]

7 2 4 F 1 2 3

馬車
一
客
朝
夜
12
1
也
1

て
る
て

女性ストライキを考へるよりかた。ひ

牡丹は謝あるを謝ひたりと云ふに

分
分
乙
乙
セ
エ

女は、
12
を
と
う
う
2
不
や
言
言
言

手
を
置
て
前
で
盤
に
花
を
た
か
う

己未亥子

友全を皆集めて紹介した。女は竹露に友全の字に寄って来た。

数
分
十
人
、

 和
十
二
二
イ
、

 と
、
 三
五
三
一
く

何々言ふ
有難う

言方士一上

と
や
有
難
い
と
あ
丑
は
言
う
と
一
花

す、
か、
り、
乙
木
た
う
と、
耳
の
横
に
右
側

7月 1日 午後 5時 15分
 7月 2日 午前 10時 15分
 7月 3日 午後 5時 15分
 7月 4日 午前 10時 15分
 7月 5日 午後 5時 15分
 7月 6日 午前 10時 15分
 7月 7日 午後 5時 15分
 7月 8日 午前 10時 15分
 7月 9日 午後 5時 15分
 7月 10日 午前 10時 15分
 7月 11日 午後 5時 15分
 7月 12日 午前 10時 15分
 7月 13日 午後 5時 15分
 7月 14日 午前 10時 15分
 7月 15日 午後 5時 15分
 7月 16日 午前 10時 15分
 7月 17日 午後 5時 15分
 7月 18日 午前 10時 15分
 7月 19日 午後 5時 15分
 7月 20日 午前 10時 15分
 7月 21日 午後 5時 15分
 7月 22日 午前 10時 15分
 7月 23日 午後 5時 15分
 7月 24日 午前 10時 15分
 7月 25日 午後 5時 15分
 7月 26日 午前 10時 15分
 7月 27日 午後 5時 15分
 7月 28日 午前 10時 15分
 7月 29日 午後 5時 15分
 7月 30日 午前 10時 15分
 7月 31日 午後 5時 15分

吾の老を舞ふくくで
一と平讀し
言つし

左邊の二、朝録を急ぐ方と云ふと、反丑之へ

言つてゐる
と書いてた。
紙に書いて

女
變
一
々
態
度
を
苦
白
け
や
し
と
思
ふ
こ
ろ

支分士人
君は偉
つた、
新橋
書

主
中
轉
2
3
合
左
右
3
遠
遠
時
入
左
右

乙 集 第 9 卷 第 12 号 乙 集 第 9 卷 第 12 号

A vertical line of handwriting practice on a cream-colored background. The line consists of a solid blue line on the left and a series of dashed blue lines on the right. The dashed lines are arranged in a series of connected loops, resembling a cursive 'f' or a series of connected 'e's. The line is oriented vertically, with the solid line on the left and the dashed line on the right.

各
 兵
 同
 在
 事
 致
 以
 忙
 乞
 照
 外

木
竹
草
花
鳥
魚
虫
人
物
器
物
名

（博文堂發賣）

[illegible]

12
2
牧部
12
不平を言つた

早
く
解
く
方
法
を
古
人
に
す
る

死影の無い暮れにすすまふ

女
我
三
フ
に
す
つ

友部は
叔部
に
な
に
と
や
う
な
態
度
を
自
ら

たのたい

ぢや 習 罕 ぞう 友 友

三
十
ろ
と
か
か
り
ま
す
ま
い

九二角五分

ま

牧師は、つゆつと正面に物を突き立て

は、いづれ皮肉を言ふ友ありた。たゞ、今日
は無意図に態度に
出た。少しも事務を
しなして行つた。

葬式の三分の一以上は死骸の無つ葬式を介
うとてあつた。日本が故郷に死んだ両親と
縁者とか、送行先きびしくあつた。友人など
か、さう言ふ人の追悼會見たう友告別式があ
かつた。ひ、今日の葬式、別は五月
堀がまるい葉は入るあつた。それと、富塚
の花飾や、お徳の待望心、お徳目や世英様交

の客事はあつた。牡丹は、宿りやいほ
し。今午の事や、昨夜の宴の喧嘩して
みた。葬式も想ひ通りつた。

葬式

葬式は新葬式詩人のそれであつた。音は
鳴つ。會堂に一人の男と僅か十五人の友人等
が並ぶ。りてあつた。今午に一葬の習合を
振つて、葬式はこつた。遺品を焼く。葬
式の日は、友人や、やうに飾つてあつた。雨
主とた、花壇には、やあ、い、位、来つた。

マースヤカーネーにきや、かうかオーストリア
 へ行く。あつた。

式の後には、つゝ、主の五人は、尋常一ヶ月
 経たず、その時、おとけりて、小聲に、お人の

追悼を、おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。

一歩に、おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。おとけりた。おとけりた。おとけりた。

おとけりた。

「あ丑さへは知りまへ下。田舎の奥びたさ

しまさか、^{死後}お世とは言へた。田舎を捨

てたか。お世は、お世に用いた。若白

はなうと驚くたうと。お世に用いた。お世

田、さうびまめた。お世に用いた。お世

お世は、お世を食卓に、お世に用いた。お世

お世は、お世を古新聞にくくりた。お世

アスダの白く、お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

お世に用いた。お世に用いた。お世

あまの心、寢を解し、はかりうと愛、うわした
うを会いた。

あつた、ぱく、かに、た、つ、けた、あまは、
知、こ、みた、大、匠、か、う、て、あ、く、か、
に、た、た、の、牡丹は、顔、に、右、手、を、蓄、て、
も、食、た。

ど、ろ、ろ、あ、ん、た、あ、と、く、ろ、ろ、た、り、た、
つ、け、人、に、人、に、あ、ん、た、た。

い、ろ、ろ、ろ、ろ、牡丹は、あ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、
あ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、

ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、
ど、ろ、ろ、あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、
あ、ん、た、

寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、

牡丹は、顔、を、あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、
あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、
た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、

あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、
あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、

あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、
あ、ん、た、あ、ま、の、寢、を、解、し、あ、ん、た、あ、ま、の、

エ、
ハ、
ニ、
ノ、
ヲ、
チ、
リ、
ル、
レ、
ロ、

ちありてす。此父は、此花を著りたりて
「やう」

昔は昔、今は今

ちありて、上層を望み、この形にして、至めて

みた。此花は、此花の、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

か

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

此花は、此花は、此花は、此花は、此花は、

する人です。健康、愛は、如父之の如し。

ひびき
こほりや
たそけ
たのや
たのや

た
カ
3

ちや 14 年 12 月 2 日 金 曜 日

受へは、岸上の花叢を足下から立ち上った

子
作
お
、
青
中
少
来
こ
た
へ
。
湯
あ
つ
き

3
2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

以無以
散々
左提物
左存包
導
左加

本
書
に
著
者
、
花
丸
、
お
お
あ
、
い
、
あ
、
生
か

のちや左のへきへ
へ
優へ
たう
お
た

秋田県立
函館市立

ひまわりを
以て花
草を傳へた

花に重り
はな
びーやう
こり
色に
重り
に

[illegible]

人壽是

五

其交、紅田は膏やゝ力井立呼々生士うゝ

とあを
外を
や、
か
と
人
で
した
う

か
此
つ
こ
道
入
う
一
事
一

然
の
終
極
意
に
至
る
こ
ろ

